
遠い警笛

春井 武修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い警笛

【Nコード】

N0418Z

【作者名】

春井 武修

【あらすじ】

ありふれた平穏な日々と、そこに隠された酸鼻な運命。それは誰にでもあり得た未来だった。

もちろん、一人道場で竹刀を振り続ける少年、勝田も。しかし、彼は、そしてすべての人々は、そんなことを知る術さへ持たなかった。

ある、夕闇が道場の中へ滑り込もうとしている夜、勝田は、闇の中に「遠い警笛」を聞く。

彼を襲う激震を超え、勝田は生きることについて考える。

遠い警笛（前書き）

先の東日本大震災において、甚大な被害を被られたすべての方々に、お悔やみを申し上げます。

遠い警笛

「先輩、もうそろそろ上がりませんか？」

浦津は言った。不規則に弾んだ彼の息は、かなりの疲労をうかがわせる。西の壁に掛けられた時計は、すでに七時を回っていた。浦津の、防具に隠れた肩は、時計の秒針が進むのと同じリズムで静かに上下する。

剣戟の止んだ剣道場は、通り雨が過ぎ去った後のように、シんと静まっていた。その中で、二人の、深い呼吸の音と秒針の進む音だけが聞こえてくる。今まで、激しく汗が振り落とされていた道場の床からは、まとわりつくような湿気と、剣道着に身を包む者特有の体臭とが入り乱れて、道場内を漂っていた。

「帰るんだつたら先に帰ってくれ。もう時間も遅いしな。俺はもう少し残ってく」

静まりかえった道場で、勝田の声は異様に大きく響いた。そして、その最後の余韻が消えてしまうと前よりも一層重厚な静寂が、場を支配した。今日はなぜか、外の音が道場内に入ってこない。いつもなら、六時を過ぎた辺りから道場が面する大通りを、都会の帰宅ラッシュが通過する頃だが。

まだ春分までは間がある今日、外では既に、夕闇が重く覆い被さっていた。東向きの壁に取り付けられた窓からは、抑えようもなく暗闇の侵食が進行している。道場の劣化した蛍光灯が放つ白光に対して、その闇は、より一層、この道場の内と外、あるいは自分と下

界との境界に敷かれた隔絶感のようなものを、色濃くしているかのような気がした。

「でも、僕が帰ったら、先輩の相手がないじゃないっすか」

浦津が言う。言葉に呆れたようなトゲがある。彼は、道場内をちらりと見回した。彼ら二人の他には、誰もいない。他の道場生は、もう日が暮れる前に全員帰ってしまった。勝田は、浦津に無理を言っただけで残ってもらっているのだ。

「ああ、俺は一人で素振りでもしてるさ。何となく、まだ出し切れていないような気がするんだ」

やはり、勝田の声は、彼が思っていたのより何倍も大きく響いた。彼には、自分の口から出た言葉が、なぜか虚勢を張っているかのようには聞こえる。それが、彼の前向きな衝動から繰り出された言葉だっただけに、どうしてそういう風に聞こえてしまうのか、不思議だった。夜の闇が、既に勝田の心にまで到達し、干渉を始めているのかもしれない。

言っただけだ。まだ気分が晴れきってない。彼は心の中で呟いた。

「じゃあ、僕はもう帰りますよ。けっこう宿題溜まってるので」

「おう。悪かったな、付き合わせて」

浦津は、小さく一度頭を下げた後、急ぎ早に道場の隅へと下がっていった。あまり音を立てないように丁寧に座って、手早く防具を解く姿からは、なるたけ早くこの場を去りたいという、彼の思いが伝わってくる。たしかに、浦津の立場からすれば、やりづらいに違いない。勝田は、浦津に対して申し訳ないことをしたような気が

して、そんなもやもやを振り払うために、声を出して竹刀を振った。放たれた声や、足音、竹刀が風を切る音は、放たれたそばから、窓の外の夕闇へ吸い込まれていったが、間を開けずにひたすら見えぬい相手を打ち倒すことで、無神経な静寂が訪れることを回避する。心拍数が上昇して、薄暗かった道場内が、一段階明るくなったような気がした。

「春の大会が最後だからって、少し根つめすぎなんじゃないですか？」

浦津は、突然竹刀を振り回し始めた勝田を見て、驚いたように言った。

「かもな。でも、こうしてる以外にやることもないしな。お前もその内分かるぜ、こういの」

勝田は、竹刀を振るのを止めて、言う。だが、彼の言葉は、虚空中で同じ円周上を旋回したあげくに、やはり闇の中に消えていった。今のところ、気持ちも、音も、すべてが行くべきところに逢着せず、闇の引力に負けて失踪してしまっている。今の彼の言葉が、果たして浦津まで届いていたのか、それすらも、彼には確かめようがなかった。浦津も何かを言いたげだったが、その言葉は結局口の中に押し戻された。

再び密度の濃い静寂が襲い、勝田は改めて竹刀を振り始めた。それ以上浦津との間に会話はなく、次に彼が手を休めたときには、道場の中に浦津の姿はなかった。道場の中に残っているのは、彼一人となった。

隙のない静謐が辺りを覆う。自分の呼吸や拍動さえ、今はどこか

遠くへ押しやられて、何重もの壁に遮られているようで、聴覚には一切の影響を与えてこない。道場は、為されるがままに湿った闇を受け入れ始める。蛍光灯が大きく瞬く。その一瞬の暗みのなかで、何者かの陰影が宙を躍動し、次の瞬間には消えている。その影は、彼自身のようにも見え、あるいは長年視覚にこびりついた、道場生や大会の対戦相手のようにも見え、また、それ以外の何かであるようにも思えた。

暫くの間、勝田の頭の中さえも、重苦しい静寂が支配していた。半ば、深い眠りの中にあるかのような、無感覚で無感動な意識の継続。だが、それは突然鼻を突いた、小さなくしゃみによって破られた。そして、脳の神経回路に、雑多で氾濫した思考が蘇ってきた。

彼は大会について考えた。春の大会、彼にとって最後の大会。そして、それ以後は、なんとか自分を納得させて、剣道をやめてしまおうという、決意。その決意があるからこそ、結果によって自分を納得させるために、大会に向けて、今こうして竹刀を振っているのだ。

地区予選は二週間後の三月十一日。そこで個人成績が三位以内であれば、上の大会へ進める。最終的には全国まで続く選手権大会だけれど、もちろん、そこまで狙う気は毛頭ないし、実質的に不可能だでも、もし運がよければ、その下の関東大会出場を狙える可能性があった。そして、今のところの目標は、その出場権を得ることだ。

この大会は、地区予選ですら、勝田の出る地域では激戦区となる。そんな中でも、彼は一応、この激戦を勝ち上がっていただけの実力は、内外から認められている。幼稚園のころから通っているこの道場は、この辺りでも比較的、由緒と実績のある道場で、他の稽古場とはよく合同稽古をしに行くが、いざ一対一で真剣勝負となったと

きに、勝田が全く力の及ばない相手はおらず、互角に渡り合える相手も、片手の指で数えられるほどしかないのだ。その上、今回の地区予選の組み合わせでは、彼らとは決勝戦でしか当たらないようになっていて。運が良いと言えばそうなのだろうが、今回地区予選を突破するのは、彼の中ではかなりの自信があった。そしてまた、この地区予選に比べれば、上位予選はいくらかレベル的に見劣りするものだった。そして、その上に県大会があり、関東大会がある。

「お前に才能とセンスを要求することはできませんが、勝負勘と馬力は百人力だ。運がよければ、関東ぐらいは目指せる」

以前、三段の昇段審査の時だったか、結果を報告しに行った勝田に、師範は言った。その時は、師範も半ばからかうようなつもりで言ったのだろうが、今となってみると、その言葉は勝田のモチベーションの根底を成す一部になっていた。

師範の言うとおり、勝田には、いかんせん十分の一秒の間に臨機応変な戦術を繰り出せるようなセンスはないし、相手の動きが止まってみえるなんてこともない。しかし、その一方で、彼は、どんな受けの構えに対してもそれを打ち破り、隙を作り出すパワー、そして膠着した鏝迫り合いから、瞬時に決着を付ける引き技のスピード、そしてそれらをいつ繰り出せば勝利を手にすることが出来るか、という勘には、絶対的な自信があった。

不器用は不器用なりに、やれることがあるさ。彼は、口癖のようにいつも言っている言葉を、今も繰り返した。

「だけど……そう、だけど。」

彼は、今まで築き上げてきた自分というものに、逆接を入れずにはいられなかった。

本当は、夏の大会こそ、彼の最後の大会となるはずだったのだ。今更、「春が最後」という事実はどうすることもできないが、その現実には、悔しさを感じずにはいられなかった。そして、春が最後となった理由が、自分の学力にある、という事実に行き着くと、その悔しさは簡単に、自分のふがいなさを責める感情へと変貌した。

「実力テストごとで、学年五十番台に入れなかったら、キリの良い大会が終わったところで剣道をやめる」

これが、進学校に入学した勝田へ課せられた、剣道を続ける条件だった。それまで、高校二年の冬までは、その条件を何とかクリアしてきた。勝田自身、かなり苦勞をして、その学力を維持してきたが、冬休みを明けた実力テストで、ついにそれは破局を迎えた。勝田に弁解の余地はなかった。単純に、内容に追いつけなくなったのだ。

学校が終われば、すぐに道場へ飛び込んで剣道着に着替える。そんな彼の生活スタイルは、もう何年も続いていたが、そのおかげで一日中自由に行きまわられるのは、盆と正月の数日だけ。限られた時間の中で、彼の受容能力は、既に限界に達していた。

その上、いくら剣道が、勝田にとって、自分を構成する重要なものだったとしても、確実に彼は、剣道に対して疲労を感じていた、それが前回のテストのモチベーションを落とす理由の一つとなったのは間違いないことだった。もしかしたら、剣道をやめざるをえないことが悔しくて、この最後の大会に全力を賭けるというのは、彼の建前であって、剣道をやめることで、時間的な余裕を得ることを、本音では喜んでいいのかもわからない。

彼は、一度作り上げられた建前が、長い間適用され続けることによって、それ自体独立して、こちらの意志に反した言動を惹起すると言っことを知っていた。だから、彼自身、これが最後だから、と

公言して、周囲に自分の努力する姿を見せるといのが、浅ましいことのような気もしていた。しかし一方で、いざ試合となると、他のことを放り出してでも、こうして竹刀を振り、真剣に勝負をすると言ふ行為が、自分に必要なことなんじゃないかとも思えて、今でも、どこまでが建前で、どこからが本音なのかというのが、測りきれずにいた。それこそが、どれだけ竹刀を振っても打ち払うこと出来ない、晴れない思いだった。

勝田は、雑念を振り払うつもりで、大きく首を振った。そんなことはどうでもいいのだ。たとえ、自分が本心では剣道をやめたいと思っていようが、思っていないが、自分に残されたのは春の大会だけであり、それを乗り越えなければ、先に進むことは出来ないのだ。自分が何を考えていようと、相手は全力でぶつかってくる。それに対して、こちらも全力で望むしか、するべきことはないのだ。いくらそれが建前だろうと、その義務を放棄する理由にはならない。

不器用は不器用なりに、やれるだけのことをやらないといけない。

勝田は時計を見た。浦津が道場を後にしてから、もう既に何十分かが経過しているかのよう思われた。が、実際には、あれから過ぎたのは数分にも満たなかった。侵入する物体の密度によって、光の進む速さが変化すると言うが、どうやら、人の思考というものも、洗練された無音空間の中では、異常なほど高速で回転するらしい。そして相対的に、時間の進む速度は、まるで強い力で歪められたかのように、のろくなつていくようだ。絶え間なく侵食を続ける夜の闇も、この傾向を助長するファクターの一つであることは間違いない。

まだ、出し切れてないものがある。勝田は思った。少なくとも、ま

だ、決着を付けるために踏まなければいけない手順が残っている。

勝田は、静かに、大きく息を吸い、吸いきったところで息を止めて、ゆっくりと目蓋を閉じた。世界が今、大洋のまっただ中にいるような静けさにあるように、心の中も、空っぽにしてしまおうと思つた。そうすれば、彼自身の、剣道に対する熱意のほどが、今よりも鮮明に見えるのではないかと思つた。

彼の集中力は、常人のそれとは違い、とても深く、排他的で、探索的なものだつた。多くの人々は、何か一つの物事に、雑念を取り払って専念することを集中というが、彼の場合、集中というのは、特定の行動に向けられるものではない。集中すること自体が、彼にとつて目的を持った行動なのだ。あるいは、彼の集中は、瞑想に似たものかもしれない。雑念を取り去つて、どこまでも深く自分の心に潜り込み、そこにある何かを探る。そして、それが彼にとつて不正なものであれば、適切な介入で、あるべき姿に変えてやる。その介入は、どちらかと言えば、元々ある複数のチャンネルから正しいものを選ぶとか、注意深くラジオの周波数を調節すると言つようなことに似ている。彼の集中とは、そういうものなのだ。

しかし、今回は、どれだけ神経を研ぎ澄まし、雑念を取り払つていつても、自らの本心の、核心を形作るものを捉えることはできなかった。全体としてはぼんやりと、大まかな輪郭を象つているのだが、それはアメーバのごとく常に形を変えていて、捕まえたと思つても、タコのようにぐにやぐにやと体を変形させたり、細切れになることによつて、思考の網の目から簡単に逃れていくのだ。

と、突然、勝田の集中の中に、異質なものが混ざり込んできた。それは急に思考の中に流れ込み、悪質なウイルスが感染した知能を汚染していくかのように、それは一瞬にして思考全体が飲み込まれ

ていった。脳が誰かにハツキングされ、無理矢理何かを受け取らされるような感覚。勝田は驚いて目を開けるが、何かが自分へ流れ込んでくることを、彼は阻止することができなかった。そして、それはやってきた。

それは、どこか遠くから聞こえてくる警告音だった。甲高く、鋭い、耳を刺すような響き。はじめ、勝田はそれを派手な耳鳴りではないかと思った。が、そうでないことはすぐに分かった。それは、生命活動の一部としてはあまりにも無機質で、よそよそしく、自然さを欠いていた。そしてまた、その警告音は、実際の音源は遙か遠くにあると感じられるのに、まるで水平線の彼方に浮かぶ船の、陸に向けてならず声高な汽笛が、海岸線から何キロも離れた場所でも鮮明に聞こえるような、そんな感覚も与える。

汽笛……いや、これを汽笛と表現するのでは、あまりにも安直すぎる。いわば、これは何か重大な危機を周知させるための警笛。モールス信号のように、音の連なり方で意味づけるのではなく、ただひとえに、その音程、音量、周波数で、生物の本能に訴え、警戒心をかき立てるサイレン。

その、揺らぎない高さ、大きさを保つ警笛は、彼の心をわしづかみ、驚掴みにし、容赦なく揺さぶった。彼の中で、一刻も早く、この場から逃げ出してしまいたいという恐怖心が膨らんでいく。勝田は、道場の床が突然、波だった海面に浮かべられ、大きく揺られているような錯覚を起こした。ついにはまともに立っていることもできなくなつて、彼は、重くのしかかる防具を身につけたまま、床へうずくま、蹲った。固く握りしめていた両手から、竹刀の柄がこぼれ落ちそうになる。

波立ち、ぶつかり合い、黒々と渦を巻き、大地のすべてを覆い尽

くすようなうねりが、脆い足下にしがみつくと勝田を弄ぶ。見えない掌に頭を掴まれ、めちやくちやに振り回されているかのような、視界のうねり。その波長にあわせて、道場中の蛍光灯が、気が狂ったように点滅する。蛍光灯の点滅によって、いくつかの影がはつきりと映し出される。その影は先ほどのように、自身の投影などと言う推測の余地を許すものではなくて、どこまでも攻撃的で、残忍な闇をまとっていた。そしてそれらは今、彼に向かってまっすぐ襲いかかるうとしていている。

「ウオオリヤアアア！」

勝田は、自分でも驚くほどの怒声を挙げ、緩みかけた諸手を、血が滲むほど強く握り直し、立ち上がりざまに、襲いかかる闇に斬りかかった。太刀筋は、正確に闇の根本を捉え、真つ二つに切り裂くが、そこには一切の手応えも存在しない。一方で、彼の焦燥をあざわら；嘲うかのように、影はそこら中から浸みだし、沸き上がってくる。それは、勝田自身の恐怖を餌に膨張し、その姿をあふれ出させているようだ。その出現に合わせて、いや、それよりも早く、勝田は渾身の力で竹刀を振るう。道場には、彼の足裁きが床とぶつかり合って鳴らす衝突音と、怒声のみが響き渡る。警笛は、まだ彼の耳の奥で鳴り続けている。

それから、どれほど竹刀を振り続けたのか、勝田の息が切れ、影も出現しなくなった頃には、あの警笛が全く消滅していることに彼は気づいた。やってきたのは、少しの余韻も残さない休止。その混乱は、はじめが唐突であれば、終わりも奇妙なほど唐突であった。

今、道場には、不安定な、そして粗末で脆い無音状態があるのみだった。外側から少しでも衝撃を加えれば、とたんにすべてが崩れ去ってしまうような、そんな空間が、勝田を取り巻いて流れている。

この不安定な世界の中で、勝田は、居ても立つてもいられない気持ちになって、その場に突っ立ったまま、むしり取るように面を解いた。直に地肌に触れ、吸い込んだ空気には、彼が未だ経験したことがないような、緊迫した冷ややかさが、色濃く含まれていた。

道場から一歩踏み出すと、彼の視界には、いつもと何一つ変わらない、街の夜景が広がっていた。道場の面した道路では、絶えず車が行き交い、あるいは列を成し、夜を貫くヘッドライトで、眩しく帰路を照らし出している。高架の線路では、厳密に決められた間隔で、一度に何千という帰宅者を乗せた電車が、大きな通過音をとどろ・轟かせて次の駅へ向かっている。足下の通気口からは、都会の真下に巨大なトンネル網を張り巡らす、地下鉄によって押し出された空気が吹き上げてくる。道路の向こう側に広がる家並みは、一様に暖かな食卓の明かりを灯し、天を衝くような高層ビル群は、意図せず夜空の一角を隠匿している。

道場の中で見た、あの忍び寄る闇はなんだったんだろう。道場の中では、あれほど絶対的な闇を感じられたのに、外の世界には、純粹な闇など一かけら；欠片も転がってはいない。頭上に覆い被さる夜空でさえ、地上の明かりに照らされて、薄暗い紺色をぶら下げているだけだ。

あの警笛は、うなるような地面の動きは何だったんだろう。それらは勝田にとって、あまりにも非現実的で、理解の範疇を超えるものだった。それらが実際にあったのかどうかさえ疑わしくなって、勝田は、ポケットから携帯を取り出し、何か変な音を聞かなかったか、と浦津にメールを送った。しかし、帰ってきたのは「何も」という答えだった。

結局、これだけでは、あの警笛が実際はなかったという証拠には

ならないだろうが、勝田は、きっと自分が疲れていて、変な幻想を催したんだ、と考えるようにしようと思った。少なくとも、起こるはずのないことは、起こるべきではないのだ。

しかし、勝田は、あの、すべてが崩れ去ってしまうかのような感覚は、忘れ去ることができなかった。

一台のオートバイが、けたたましいエンジン音を立てて、勝田の目の前を通り過ぎていく。都会の律動を狂わすかのようなその響きは、しかしやはり、この社会に組み込まれた誰かのかき鳴らす音に過ぎず、一回り大きな流れの中に組み込まれたものでしかないようにも思え、勝田に、この世界の、包括的で不可避な循環というものを感じさせるのだった。

激震

三月十一日 午後

市のスポーツセンターで行われている地区大会は、既に大詰めを迎えていた。試合会場の入り口に掲げられたトーナメント表では、勝田の名前から伸びた赤線と、別ブロックの方から伸びている赤線とが、最上段、決勝戦の位置でぶつかっている。対戦相手は、勝田が今までに幾度となく対戦したことのある、佐伯だ。佐伯とは道場同士の合同稽古でしか関わる機会はなかったが、それでもこの十年近く、毎月のごとく顔を合わせ、竹刀を向けあっている。お互いの戦法、細かな癖、弱点さえも知り尽くしている相手だ。実力、対戦成績ともに伯仲していて、ライバル；好敵手同士と呼んでも差し支えないかもしれない。

二人の、下馬評通りの頂上対決に、会場は大入りの様相を呈していた。今までで敗退した選手たちはもちろん、他の地区の選手たちも、観客の中に見受けられる。

「先輩、あと一つ、がんばってきてください」

試合に向けて、防具を準備し始めた勝田の後ろから、浦津が言う。上位大会へ行けるのは上位三名であり、もう上位大会への進出が決まっている勝田に、「勝ってください」などと言わず「がんばってください」と言うところが彼らしい。当の浦津は、個人の部、団体の部共にすべて午前中で敗退していて、午後は勝田の試合を観戦するのみだ。本人としては気が抜けているところだろうが、決勝に臨む勝田の手前、それを悟られないように振る舞っている。

「おう」

勝田は、言葉少なに返事をした。浦津は、それが強い集中のしるし・徴だと解釈したらしい。が、勝田にしてみれば、その解釈には些かの誤解を感じずにはいられなかった（もちろん、そのように思われていた方が都合のよいことは間違いないのだが）。彼の正直な心境はと言えば、すでに上位予選への出場も果たしているのだし、今までの試合でそれなりに疲労も溜まっていて、ただ、この試合を早く終わらせてしまいたいというだけだ。佐伯との試合は、いつも熱戦になりやりがいがあるのだが、その分疲れる。それに、佐伯に對して負けるのであれば、自分でも納得出来るんじゃないかという気がした。

この試合は捨てて、上位予選に全力を向ければいいや、という、かけひきを優先させる気持ちだが、勝田の中では支配的になっていた。一方で、対戦相手の佐伯はどうかというと、勝田とは対照的に、誰が見てもそうと分かるぐらい、道着の下から戦意を漲らしており、彼の応援団も、最下部の地区予選には場違いに思えるぐらい、昂奮した声援を佐伯に送っていた。それを眼にした後に、勝田が、改めて自分の足下を見返すと、妙に、いたたまれない気持ちが出てならなかった。経験から言って、直前にこんな感傷的になる試合なんて言うのは、負けるに決まっている。

ちょうど両者の準備が整った頃、試合開始の時間がやってきた。佐伯がまず、アクセル全開といった勢いで揚揚と立ち上がり、それにつられて、尻を蹴り上げられるように、勝田が立ち上がった。洞察力に富んだ人が見れば、もう既に勝敗は言うまでもないかもしれない。

しかし、そのためにあっさりと試合を棄権できるものでもない。

勝田は、床に貼られた立ち位置を示すガムテープの上に立って、帯刀の状態では佐伯と対峙し、礼をした。視線は、相手から離さない。頭を上げ、竹刀を構えながら、蹲踞をする。その時、勝田は佐伯の眼を直視した。彼は、相手の手の内を読み、その上こちらの意図を断定させないために、試合中と試合前、できるだけ相手の目を直視するようにしている。もちろん、ある程度の相手であれば、同じようににらみ返してくる。これは、感情を殺した視線をもってしての、にらみ合いだ。この間彼の目が捉えているものは、相手の目に現れる表面的な意図だけで、それ以上奥のものを捉えようとはしないし、このにらみ合いだけで、彼が感情的になると言うこともほとんどない。

が、佐伯との試合はいつも例外だった。彼の眼からは、安易な直視を許さない、煌煌たる眼光が放たれている。そして、勝田との試合となると、佐伯の瞳には、表面的な意図だけでなく、本来分厚いものによって内部に隠されているべき、意志というようなものが、はっきりと現れるのだ。勝田はいつも、その光に気圧けおされそうになる。

佐伯と勝田とで比べてみれば、どの点を取ってみても、そのほとんどが正反対だった。例えば、戦術に関しても、勝田が愚直なほどのパワー派で、相手の隙を見逃さない速攻を心がけ、罅迫り合いからの引き技を勝ち技と決めているのに対し、佐伯はそれと対照的な（その闘志に満ちた眼光が作り物ではないかと疑わせるほどの）技巧派で、打突時の歩数や剣先の高さに至るまで、常に相手より優位に立つために計算しているのだ。臨機応変の小技と、進退自在な足技で相手の隙を作り出し、その上にも幾多に段階を踏んだ攻めで、確実に一本を取りに行く。このように描くと、勝田は佐伯に対して勝ち目がないように見えるが、まだ、佐伯のそう言ったプレイスタイルは完全ではなく、総合的に見たところでは、勝田のパワーと敏

捷性が勝っている分、両者とも戦績は互角なのだ。

勝田は、蹲踞から立ち上がり、中段に構えるまでの間に、改めて自分と佐伯とを分析した。そしてやはり、この試合で自分が佐伯に勝ち得ないことを明確に知る。佐伯の、ある種異様な闘志が、二人の間の均衡を崩しているのだ。勝田には、なぜこれほどまでに佐伯が気負っているのか、その理由が分からなかった。どうせ勝田も佐伯も、この決勝に勝とうが負けようが、次の大会へ行けるのだし、日頃からよく試合をしていたが、二人の間に特別な敵対心もなかったはずだ。が、それは単なる勝田の主観であって、佐伯は実のところ、勝田に対して特別な勝負心を持ち続けていたのかもしれないかった。

審判長が宣告を下す構えをし、両者準備が整ったのを確認すると、声高に、

「始め！」

と、試合開始を宣言した。勝田と佐伯が、少しずつ、間合いを捉えにすり寄る。両者とも中段に構え、剣先がふれあうほどに近づく。観客は試合会場を取り囲み、両者の一挙一動を見つめている。

勝田の剣先がその場に静止し、その延長が佐伯の喉元を一直線に貫いているのに対し、佐伯の剣先は、羽虫が羽ばたくように、上下、左右と細かく揺れ、その行き先を定めない。佐伯のこの構えはいつものことであったが、これを前にするたびに、勝田は、これが一種の挑発であるように思えた。佐伯は試合中、口こそ固く結んでいるが、

「どこにでも打ち込んでこいよ。何がきても応じてやる」

と言う氣勢が、勝田にはありありと読み取れた。眼など見る必要はない。剣先が語っているのだ。普段であれば、勝田はこんな挑発に乗ったりしない。それがこちらの隙を誘う手だと言うことが分かりきっているからだ。

だが、この決勝戦の中で、この佐伯の構えを見てみると、ふと、これが佐伯との最後の試合になるかもしれない、という考えが頭に浮かんだ。

それなら、今まで培ってきた、自分の最高の一撃で勝負してみても良いかもしれない。

気合いが全身を駆け巡っていった。彼は、負けをも良しとしていた感傷的な気分が、一瞬にしてこんな大胆さを産むことに驚く。

勝田は、剣先の高さを変えぬまま、佐伯へと半歩すり寄った。覚悟さえ決まれば、佐伯の変幻自在な受けを打ち破るのは、簡単であるように思えた。佐伯は、こちらの隙を誘い出すために、自らの隙を、ほんの僅かなだけ作り出しているのだから、その隙を、佐伯が応じられないほどの、渾身のパワーとスピードで攻めればいい。無論、ただ力に任せて面を打ちに行くとか、そういうことではなくて、幾度もフェイクを重ね、罅迫りをした上で、だ。佐伯を表する愚直という表現は、技術的な側面に劣っているというわけではない。ただ、その意図が、単純で正直なのだ。

一瞬、鼻で生暖かい空気を吸った後、静かに呼吸を止める。そして、何かを爆発させるかのように怒声を張り上げ、右足を更にもう

半歩進める。剣先が小さく揺れ、佐伯の剣先をかすめた瞬間。そこにはどちらの剣先も存在していない。静かに空気を切り裂く二本の竹刀。

その時勝田は、佐伯の竹刀が上段に振り上げられた先で、その処理に迷いがあるのを見た。もちろんそれは、一秒の何分の一にも満たない小さな迷いだ。勝田は、それを見たとなんに、相手が手段を講じるよりも早く、面をめがけていた竹刀を右にずらし、閃光が走るかのごとく、無防備になっていた左胴を打ち抜いた。勝田の「胴オオウ！」と言う声が、あふれ出る気迫を伴って響き渡る。勢いで、勝田の体は佐伯の懐に潜り込むように回転し、目の前の体を押しつけるように、左後ろへ撥ね下がって残心を示す。竹刀を握る諸手に残るのは、完璧な手応えだった。誰も文句のつけようのない逆胴である。

審判団は全員、何の躊躇いもなく、勝田の背に結びつけられた赤色のたすきと同じ色の旗を掲げた。観客席から大きな拍手が起こる。その拍手の内には、まだ試合開始直後にもかかわらず飛び出した好打への驚きの色も含まれていた。改めて白線まで戻る勝田自身、驚きに似た、目の覚めたような心境だった。佐伯相手に、これほど技がうまく決まったことが、これまでに何度あっただろうか。それも、出鼻の一打で。

勝田の心の中では、この一打によってそれまでの逃避が滅却され、俄然激しい昂奮が巻き起こった。それは、自らのもてるすべての力を使った上で、相手に勝利したときの昂奮だ。彼の体中に、熱く煮えたぎるものが満ちていく。再び「始め」の合図がかかるときには、自分の勝利を確信しさえした。

試合が再開され、もう一度両者はすり寄っていく。勝田の掌では、未だ熱いものが血管を流れ、両手全体を火照らせている。が、しか

し、こうして気はやることで、警戒心が薄れていることに、彼は気がつかなかつた。

やはり小刻みに揺れ始める佐伯の剣先に対して、勝田は、もう一度さっきの考え方が通用するような気がした。さっきと同じように間合いをつめ、気合いをはき出すと、竹刀を上段まで、水の流れのごとく滑らかに、そして素早く振り上げ、すべての足のバネを動員して、佐伯の面をめがけて跳ぶ。

が、しかし、竹刀が佐伯の面の高さまで振り下ろされたとき、既にそれは勝田の脇を通過しており、ぶつかつたのは、佐伯の竹刀の先端であつた。しまつた、と、自分が打ち焦つていたことを悟るよりも早く、勝田の胴は真つ二つに割られていた。完璧な返し胴。なすすべもなく、残心を示すこともままならなかつた勝田の耳には、佐伯の金切り声と、胴を打ち割られたときの、「パーン」という破裂音が響いていた。胴の防具は、最良の方向、力速さで打ち抜かれたとき、打ち抜いた者には痛快な、打ち抜かれた者には痛烈な響きを放つのだ。

やはりこれも、満場一致の一本だ。審判が旗を揚げるまでもないほどだつた。観客席からまたも大きな拍手が起こつたが、その響きはどこか騒然としていた。それ以上に愕然としたのも、勝田の心だ。先ほどの昂奮が一転、腹から苦いものが込み上げてくる。

普段の勝田であれば、相手に簡単に返し技を決められるような攻めをしたりはしない。しかし、今回はそうではなかつた。まだ手の内に残る満足感のために、すべての警戒心を忘れ、このような結果に至つたのだ。それは自分でも信じられないことだつた。そして、勝田が再度白線に立ち、佐伯と正対したとき、佐伯の面金の奥の瞳が、嘲うような微笑みを湛えているのを見て、彼は、ある恐ろしい想像を膨らまさずにはいられなかつた。

佐伯は、今のような打ち焦りを誘うために、わざと一本目を完璧な形で取らせたのではないだろうか？

そう考えると、勝田は、佐伯の存在が、全く別の次元に行ってしまったように思われ、試合どころではないような気さえしてきた。少なくとも勝田は、剣道において、先ほどのように、対戦ごとの力入れ方などはかけひきをすることもあるが、意図的に心理上のかけひきを行おうと考えたことはなかった。そうすることは、武道にあるまじきことだとさえ思っていた。それを、佐伯がこの試合でやっつけたのだとしたら？

佐伯の掌で踊らされていたという屈辱以上に、自分の剣道観を真っ向から打ち破られたという敗北感が彼を襲った。勝田がこの大会を最後に剣道をやめることは、佐伯も知っている。もしかすれば、佐伯は、今まで互角に渡り合ってきた勝田を、最後の試合で、計画通りに叩きのめすことを楽しみにして、あのように目を輝かせていたのではないだろうか

それは勝田の浅慮な想像でしかなかったが、それだけでも彼は、打ちのめされて、深い敗北の谷底へと落とされたような気持ちになった。

勝田の落胆など尻目に、また試合は再開された。けれど、勝田は今までのように、間合いをつめて先手を取ろうという気にはなれなかった。そしてそれを見越したかのように、佐伯はじりじりと間合いをつめてくる。

この後の展開が、一方的な佐伯の攻め試合であったことは、素人

目にも明らかだった。勝田は、佐伯の攻めにどうすることも出来ないまま、ひたすら受けに回ることになった。そのままずると試合は続き、両者一本を取った状態のまま、開始後五分のアラームが鳴らされ、「止め」の宣告の下、二人は白線まで戻った。

佐伯はまだ、額に汗を浮かべながらも、涼しい顔をしていたが、勝田は、今に吐き出すんじゃないかと言うほどに肩で息をし、顔中に脂汗を滴らせていた。一方的な防戦ほど、気分が晴れないまま体力を消耗するものはない。勝田の疲労はもうピークに達しようとしていた。このまま続ければ、佐伯が打ち勝つのは目に見えており、勝田自身、こんな後味の悪い試合は早く終わらせてしまいたいと思っていた。が、それを嘲うかのように、佐伯は微妙な力具合で勝ちを引き延ばし、延長までもつれ込ませたのだ。

当然、佐伯が自分に対して、特別な恨みを抱いているのではないかという思いが、勝田の頭をよぎった。そうでなければ、佐伯がこれほど執拗に、勝田の隙を打ち損じるはずがない。一瞬、佐伯の背後に座る、佐伯が所属する道場の師範が視界に入った。その表情は、「もうそれぐらいにしておいてやれよ」

とでもいうかのような。引きつった苦笑いを浮かべているように見えた。

順序通りに、試合は再開される。しかし、勝田には既に、戦意がほとんど残っていないかった。視線は散漫であり、竹刀を握る両手には、相手を打ち崩す打突ができるだけの握力が込められていなかった。

それを察したのだろうか。佐伯は、一歩踏み込むと、流れるよう

に竹刀を回転させ、勝田の竹刀を巻き上げた。巻き上げは、普通は鰐迫り合いから間を取るときに、相手の竹刀を文字通り巻き上げ、相手の手から竹刀を落とさせる技だ。剣道の試合では、竹刀を手から離れた時点で、離れた相手に反則が言い渡されるが、それが宣告される前に竹刀を落とした相手の打突部を打ち込むと一本となる。だが、この技の難易度は高く、試合の流れの中でこれを成功させることは難しい。とはいえ、勝田の竹刀は、力が入っていないから両手から何の抵抗もなく飛ばされ、あつげにとられた勝田は完全に無防備になった。が、佐伯は、簡単に打ち込むことが出来たはずなのに、そうしなかった。ただ、その場に立ったまま、竹刀の先を勝田の胸元に突きつけていたのだ。

「止め！」

審判長が、両方の旗を揚げ、そう宣告した。観客席は再び騒然となり、あちこちからどよめきが起こった。巻き上げは、最近の公式戦では滅多に使われなくなった上に、それがうまく決まったときには、撃ち合いの剣道とはまた違った迫力が出るために、見る者のリアクションも変わってくる。

勝田は、飛ばされた竹刀を拾いに行きながら、いとも簡単に、決まらないはずの技をかけられたみつともなさと、一本を取るのではなく、ただ勝田に衆人環視の中で恥をかかせた佐伯への怒りとで、抑えようもなく、憤然となっていた。

一体どれだけ俺を叩きのめせば満足するんだ！

勝田はそう思いながら、引つ搦むように竹刀を拾い上げ、促されるままに白線に立った。審判長が、勝田に反則を言い渡す。（反則は二回言い渡されると、一本取られたことになる）勝田は、整然と、

中段に構える佐伯を、鋭い目つきでにらみつけた。しかし、それで勝田はハツとした。佐伯の眼は、真っ直ぐに勝田の瞳を見つめる眼は、激しい怒りに燃えていた。

「どうしてそんなやる気のない構えで試合をしているんだ。あの最初の全力はどこへいった！」

佐伯の瞳は、厳しく勝田を責め付けていた。佐伯は、勝田が本気でこの勝負に臨んでいないことを、既に見抜いていたのだ。勝田は、両側の頬を一度に平手打ちされるような思いだった。勝田は、それまで、彼の建前によって偽られた闘志によって、この予選を戦っていたのだ。最後の大会を、納得できる結果で終わらせたい、という建前で。これが本心からの闘志であれば、上位大会への進出が決まったから、決勝戦は力を抜いてもいい、などという考えが起ころはずはないのだ。佐伯との、この好敵手との対決に、全力を賭けて臨もうと思うはずなのだ。少なくとも佐伯はそうであった。彼は、自身のもてる一切の能力をもつ；以てして、勝田との試合を楽しもうとしていたのだ。

勝田は、自分が今までどれだけ盲目だったかということに憤慨した。そして目が覚めるような思いと共に、今からの試合時間を、しきり直して、出せる限り、全力で、佐伯も満足するほどの、いや、彼自身が満足できる試合をしなければいけないと思った。

勝田は、目蓋を閉じ、全身の迷いをそっくりはき出すように、大きく深呼吸をした。頭の頂点から足の先まで、新しい、メラメラと燃える闘志が、透き通るような熱を発し始める。すべての感覚が細分化され、整理され、さらに簡略化され、やがては限りなく無に近づいていく。彼の自我は、鉄の塊が水の中を沈んでいくように、何の抵抗もなく心の中を沈降していった。そして彼は見た。宇宙の始

まりのように、無限のエネルギーを放つ彼の中心を。

再び彼が眼を開いたとき、そこに音というものは存在しなかった。においも、味も、触感もなかった。ただ、自分と、佐伯が存在し、対峙していることだけが分かる。

勝田が一度も経験したことのない、極度の集中によって不必要なものすべて取り払われた世界。その中で、佐伯の瞳は、満足そうに輝いていた。

試合が動き始めた。審判の音が聞こえたのではない。感覚がそう告げたのだ。お互いの体が、じわり、じわりと近づいていく。その動きは、不自然なほどにゆっくりで、その一つ一つが、確かな技術と経験に裏づけされている。途端、どちらかの竹刀が宙高く突き上げられた。もう一方の竹刀も、それを追って跳ね上がる。そして、その二つはまったく同時に振り下ろされる。どちらの竹刀も、相手の面へと吸い込まれていった。が、あまりに両者同じ軌道を描いたために途中でぶつかり合い、相殺されて押しとどまり、鏝迫り合いに突入する。勝田の面金と佐伯の面金とが、互いに擦れあうほどに、両者は接近し、それぞれの闘志をぶつけ合った。幾度となく、両者の気合いが、荒々しい雄叫びとなって宙へ放たれていく。

それは、長い、とても長い鏝迫りだった。二人とも、互いの気迫の中に、微かな隙も見つけ出すことが出来なかったのだ。本来、長引く鏝迫り合いを良しとしない審判らも、あまりの気魄に、制止をかけることができない。

そのまま二人は、完全に動きを止め、相手の出方を窺っていた。いや、自分の出方を探し続けていた。その間中、観客らは息を呑んでその拮抗を見つめていた。

鏢迫り合いが始まってからちょうど一分近くが経過したとき、ついに勝田が動いた。僅かな左足の後退から、竹刀がしなるほどのスピードで引き籠手を打ち込む。が、それは間一髪でいなされ、逆に佐伯は、打ち損じに生じた一瞬の隙を逃さず、喉突きを繰り出す。ピストルから放たれた弾丸のように、空間を切り裂き直進する白い光。勝田は寸前のところで竹刀を振り上げ、その軌道をずらす。佐伯の竹刀は、軌道をずらされた後もなお直進し、勝田の、何にも覆われていない首筋をかすめ、両者の鏢がぶつかり合ったところで、また停止した。

そのときだった。佐伯の竹刀が止まるか、止まらないかの内に、突然鋭いものが、勝田を貫いた。瞬間、それは佐伯の繰り出した突きの衝撃かとも思われたが、聴覚に異常な刺激が与えられていることよって、それがあの警告音であることが分かった。

高く、鋭く、耳を刺すような、あの警笛

勝田は思わず叫びそうになった。いや、ことによったら、叫んでいたのかもしれない。驚愕、そして悪寒が体中を突き抜けた。二週間前、夕闇に沈む道場の中で、突如勝田を襲った警笛が、今日この場で再び鳴り響いたのだ。

それはやはり、勝田の警戒心を驚掴みにして揺り動かし、平衡感

覚に影響を及ぼした。嵐の海に小さないかだ一つで投げ出されたような感覚。地面が上下左右に激しくうねり始め、あまりの恐怖に、その場に座り込んでしまいたくなる。全身から、冷たい汗が噴き出す。あのときと同じ衝撃。

いや、あのとき、あの道場の中とは決定的に異なっていることがあった。それは、恐怖に戦っているのが、自分だけではないということだった。目の前の佐伯も、三人の審判団も、試合場を取り囲む観客らも、一様に何かへの恐怖を隠せずにはいた。そしてそのどよめきが最高潮に達したとき、佐伯の背後の大扉が音を立てて開け放たれ、観客たちが、一斉にそこをめぐがけて雪崩れ込んだ。審判団たちも、今すぐにでもこの場を離れ、逃げだそうとしている。審判長が、二人に向かつて何事かを叫んでいた。が、その言葉は二人の耳に届くことなく、混乱の中に紛れていく。

今この場で、何が起きているのか、何も把握していないのは、今こうして竹刀を絡ませ、それを支えに立ち尽くしている、勝田と佐伯だけ、あるいは、勝田ただ一人のようだった。

突然、場内の照明が、激しく点滅をし始めた。勝田の視界を、佐伯の面と、闇とがめまぐるしく入れ替わる。警笛は、一切揺らぐことなく、頑として何らかの危機を知らしめている。

そのとき、あの日の道場でも眼にした物影が、視界が暗転するたびに忍びよるのを、勝田は見た。それは、繰り返される点滅の中で、確実に二人へと近づき、ついには佐伯へと重なり合う。

見るべきではないと分かりながらも、逃れることが出来ずに、佐伯の面金をのぞき込む。

……面金の奥にあったのは、ただ真つ黒に渦巻く闇だった。そしてそれは、形を持たぬままに、ニヤリとこちらへ笑いかけているのだ。

なぜ、ようやく実現した佐伯との全力の試合が、こんなことになつてしまったのか、勝田には全く分からなかつたが、「それ」を見てからの彼の行動は、すべて無心であつた。ただ、この得体の知れない何かを、すぐにでも消し去らなくてはならないという本能的な意志があるのみだつた。

未だ揺れ動く地面の上、竹刀を高々と振り上げ、同時に左足で後ろへ飛び退いた瞬間、すべての力を振り絞つて、闇を覆う面金を、真上から真下へ、真つ二つに切り抜いた。それは、確かな手応えを帯びた面だつた。竹刀は面金に当たつてはじかれたが、そこから放たれたものは、確実に闇を二つに切り裂いていた。これによつて影は四散し、二人の体は、両方とも衝撃で一メートルばかり飛んだ。

暫時、揺れが止んだ。警笛はまだ、細く伸びた尾ひれを耳の奥に引っかけている。許容値を超える力を発揮したことの反動で、あちこちが軋むように痛んだ。周りには、すでに審判団も観客も、一人としておらず、起き上がった勝田の視界にはいるのは、真向かいで仰向けに倒れている佐伯と、その中間、ちょうど二人が鏝迫り合いをしていた辺りに突き刺さつた、天井から振つてきたと思われる鉄パイプだけだつた。

生きる

あのとき一体何が起こったのか、あの後自分がどうしたのか、勝田にはまるで思い出すことができなかつた。気がついたときには、病院の天井が目の前にあつて、上下すべて着替えさせられ、佐伯の横のベッドに寝かせられていた。勝田は、まったくもって訳が分からなかつたが、佐伯も特に異常なく、自分の横にいたことが、妙に心強かつた。暫くすると、勝田の母親がやってきて、あの日（それは、病院で目が覚めたときには既に、一昨日のこととなつていた）に東北で大地震が起こつたこと、東京でも震度五強を観測し、首都機能がパニックに陥つたこと、あの日、地震が起こつた後、勝田は防具を着たまま、気絶した佐伯を追つてスポーツセンターから出、その直後、試合会場の天井が剥がれ落ち、照明器具や梁もろとも落下して大惨事となつたこと、それとほぼ同時に、勝田も気絶して、そのまま病院へ送られたこと、そして、震災後の混乱と自粛の徹底によつて、今後の大会日程がすべて中止されたことが伝えられた。

あまりにも多くの、それも想像しがたい事実を一度に打ち明けられて、勝田の頭は少なからずショートせざるをえなかつた。東北で起こつた大地震というのは、あくまで遠く離れた地での出来事に思われ、試合会場の事故の件も、その時の記憶がないことで、実感の湧きようもなかつた。

そのとき理解できたのは、あの佐伯との試合が、自分の最後の試合となつてしまつただけだつた。それが一番、自分に関わる重大なことだつたのだ。それは、勝田にとって、かねてからの目標が達成できなくなつたことを意味しており、たとえばあの佐伯との試合で、全力を出し合うことができなかつたことを考えても、訪れる喪失感を慰めることはできなかつた。きつととなりで眠っている佐伯も同じ

ように感じるんじゃないかと思った。

意識を取り戻した翌日に、勝田と佐伯は揃って退院した。二人の間では、退院の手続きをロビーでするときに、佐伯が、

「本当にやめるのか？」と、勝田に聞いた。勝田はそれに対して、何も言わず、ただ微笑みながら、うつむき、両手の平を二、三度握ったり開いたりしただけだった。佐伯の問いには、またいつか決着を付けよう、という気持ちが読み取れた。

結局何も分からず終いであったが、それから、勝田にとって、あのとき何が起こっていたのかを考えさせられる機会は幾度もあった。

あの日、三月十一日から一週間ほど経った頃、地方新聞の記者が、勝田のもとを訪ねてきた。あの日、試合会場で起こったことについて聞きたいという。しかし、勝田は、何も話せることはない、玄関先で帰ってもらった。実際彼には、誰かにあの日の出来事を話せるほど、何が起こったのかを整理することができていなかった。だが、この訪問は少なくとも、あの日起こった何かが、彼の想像の内に起こったことではないのだということ、彼の中で裏付けるようになった。

勝田の混乱とは関係なく、日が経つにつれて、被災地東北の惨状は、テレビ各局の報道によって明らかとなっていた。あの、警笛の響きによって感じた波のうねりは太平洋沿岸で現実となり、海沿いの街を跡形もなく崩壊させていた。

ある震災報道番組の中で、インタビューを受けた、津波の被害を受けたある町の町長が言っていた。

「あと少し、あとほんの少しだけでも早く、地震が発生することが分かっていれば、大津波が来ることが分かっていれば、もっとたくさんの命を救えたかもしれない。緊急地震速報では、遅すぎた。津波警報が出た後の対応も、遅すぎた……」

それは、詮のない話だった。が、あの警笛は、と考えると、あれは、明らかにこの震災を予知したものだたのではないかと、勝田は思った。なぜ勝田にそれが聞こえたのかも、どうしてそれを知らせるのが警笛という形だったのかも、彼にはまったく分からなかったが、あの警笛は、間違いなく、この大災害を事前に知らせようとする、何者かの意図が働いていたのだ、と彼は思った。

そしてまた、彼は最初に警笛を聞く直前の、何者かが自分に侵入してくるような感覚を思い出した。その後、すぐ警笛がやって来たというのなら、そのとき入り込んだものこそ、勝田に震災を予測させようとした何者かの意志であり、警笛を聞かせる引き金だったとも考えられる。

勝田は更に考えた。なぜ自分が、あの警笛を受け取ることとなったのか。彼は、最初に道場で警笛を聞いたときと、二回目、佐伯との試合中に警笛を聞いたときのことを、できるだけ順を追って思い出そうとした。

二度とも、俺は何をしていた？……そう、剣道をしていたんだ。それは共通している。ただ、一度目は一人で、二度目は佐伯が相手だった。そうだ、警笛が聞こえる前は、二度とも、他の音が聞こえ

ない状態だった。一度目は、そもそも道場の中に音が入ってこなくて、二度目は、集中が聴覚を麻痺させていたんだ。そう、それから、二度とも、警笛を聞いたのは、強く集中していたときだった……

集中。彼は、この集中というものが、一連の出来事のキーワードであるような気がした。つまりこういうことだ。何者かが、どのような形では分からないが、震災を予知させるための電波のようなものを流した。そしてそれが、特殊な集中を ラジオの周波数を調節するような集中を していた勝田に偶然キャッチされた……

このように仮説を立てれば、多くの疑問が、解決するのではないかと思えた。まるでSF小説の安っぽい理論のようだったが、これ以外彼には考えようがなかったのだ。

震災からちょうど一ヶ月が経った日、唐突に、彼は警笛の正体を知ることとなった。その日もやはり、様々なことについて物思いにふけていた勝田に、あの警笛が訪れた。また何かの前兆かと、慌てて顔を上げると、その警笛は、テレビのスピーカーから流れ出ていることが分かった。その時画面に映し出されていたのは、海岸に向かって、揃って合掌し、目を伏せる人たち。

それは、震災によって亡くなった人々への、黙禱を促すサイレンだった。

勝田は慄然とした。この、ただひたすらに被災者を思う悲痛な響きが、被災者を悔やむ人々の思いが、あのととき、彼の頭に流れ込んでいたのだ。

……しかし、彼はそれを思っても、慄然とならずにはいられな

った。

仮に、極度の集中によって、彼らの犠牲者を悔やむ思念が、警笛として聞こえたのだとして、一体俺に何が出来たと言うんだ！

答えは限りなくNOだった。あるいは、他にも、あの警笛が聞こえていた人はいたのかもしれない。あの時、あの瞬間に、勝田と同様の集中を得ることに成功した人々が。しかし、いずれにせよ震災を回避することはできなかつたし、それによって何か被害が軽減されたという話も聞いていない。つまるところ、時を超えるほどの強い意図も、空しく失敗に終わったと言うことになる。

それを思うと、勝田は、漠然と、逃れられないんだ、という諦めのようなものを心に宿さずにはいられなかつた。

震災からすでに数ヶ月が経った今、被災を免れた人々は、混乱の中から立ち直り、再び震災前とほとんど変わらない生活を送っている。各テレビ局も、震災に関する報道を、犠牲者追悼を主体としたものから、復興に檄を飛ばすようなものへと転換している。震災後の人心の変化について、ある作家が海外でこう講演していたのが、新聞に掲載されていた。

「日本人が、これまで、次々に押し寄せる自然災害を乗り越え、ある意味では仕方ないものとして受け入れ、被害を集団的に克服する形で生き続けてきたことは確かです

今回の震災で、ほぼすべての日本人は激しいショックを受けました。その被害の規模の大きさに、今なおたじろいでいますし、無力

感を抱き、国家の将来に不安さえ感じています。

でも、そのうちに、我々は精神を再編成し、復興に向けて立ち上がっていくでしょう我々はそうやって、長い自然災害との歴史を生き抜いてきた民族なのです」

確かにその通りだ、と勝田は思った。今や、被災を免れた人々が震災について考える時間はぐっと短くなり、国民の多くが、またいつもの通り、その内元のように戻るのだらうと思っっているように見える。

しかし、勝田は、忘れてはいけないことを忘れている、と思わずにはいられなかった。

それは、今回被災した人々に訪れた死というものが、今こうして生きている自分たちと関わりのないものではないということだ。

この震災で犠牲となった人々は、その瞬間が訪れるまで、何の変哲もない生活を送っていた。あるいは、彼らの中で特別な出来事があったかもしれないし、人生の転機を迎えていた人々もいたかもしれない。しかし、彼らは一様に、必ず明日が来るものと信じて、いや、信じるまでもなくその日その日を過ごしていた。

つまり、彼らがしていたのと同じように、何気ない今を送る自分たちにも、一皮めくれば常に得体の知れない何かがかうごめく地球という大地に住んでいる以上、いつか順番がやってくるということを、忘れてはいけないのだ。決して命ある明日は、約束されたものではないのだ。

そして、そのように思うと、彼の心の中には、また違うものが浮かんできた。それは、今、自分が生きているのだという疑いようなない実感だった。死を直視することで見えてくる生。そんなことは小説の中の話かと思っていた。しかし、彼は今、その理論を全面的に肯定することが出来た。

いつか自分たちの番はやってくる。これもやはり、疑いようがない。しかし、少なくとも、そう考えている今現在は、自分たちの番は来ていないのだ。勝田は、そう考えると、神というものの存在を信ぜずとも、今生きていることへの使命感というものを、思わずにはいられなかった。

そう、今を生きなければいけないのだ。今までよりも強く、一日一日を有意義に。

たとえ生きるということ自体に意味を見いだすことができなくても、与えられた生、偶然の生のために。そして、生かされなかった命のために。

たとえすぐそこまで死の影が、闇の侵食が迫っていようとも、たとえその距離を知ることができずとも、今を、全力で生きなければいけない。そして、幸運にも自らの番が、命ある内に訪れなかったときには、次の世代に伝えていかなくてもはいけない。死はもうそこまでやって来ているということ。だからこそ、生ある今が大切なのだということ。

死を直視することを

生を当然視しないことを

それが、すべての生へ報いることであり、すべての死へ報いるこ

となのだ。これは、愛とか、友情とか、個性とか、道徳とか、それ以前の問題なのだ。

それを知るきっかけを、この震災が、そしてあの警笛が与えてくれた。

勝田は、自分の部屋で、一人そう結論づけた後で、ひとしきり、深いため息を吐いた。どうやら、この現実には、理想的な 苦勞と結果が直結した結末を得ることはできそうにない。

日々を全力で生きる。それはきつと難しいことだろう。疲れることなんだろう。

でも、だからといって、自分が死に直面したときに、達成感を知らないままで、満足のできる一本を取らないままで死んでいくことを、俺は許せるだろうか。悔やみながら死んでいくことに、俺は耐えられるだろうか。

とにかく、今、やるべきことをやらなければいけない。勝田は思った。そして、自分の部屋に立てかけてある竹刀を見た。あの日から、すぐにでも使える状態のままに手入れしてある。防具も道着も、いつでも使えるように、念入りに洗って、袋につめてある。

気づいたとき、勝田はすでに家を飛び出していた。右肩には防具を背負い、左手には竹刀を握って。

「決着を付けようぜ、佐伯！」

きつと佐伯も、稽古場で彼を待ち受けていることだろう。彼らの

試合は、まだ一本残っているのだから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0418z/>

遠い警笛

2011年12月3日12時00分発行